

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：32607

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25463589

研究課題名(和文) 認知症高齢者の生活行動を引き出すコミュニケーション教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Developing an educational program of communication to elicit daily life behaviors among elderly people with dementia

研究代表者

小山 幸代 (Koyama, Sachiyo)

北里大学・看護学部・教授

研究者番号：70153690

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、認知症高齢者がその人らしく生活するための重要な要素の一つである、彼らが長年にわたって身につけてきた生活行動を発揮し日常生活を送ることを支えるために、「認知症高齢者の生活行動を引き出すコミュニケーションスキル教育プログラム」を開発した。本教育プログラムの特徴は、彼らの生活行動を引き出すコミュニケーションの具体的方法とその根拠をエスノメソドロジー研究による分析により明らかにし、教育プログラムの教材とした点、それらを活用したプログラム参加者の実践事例の検討を取り入れた点にある。本教育プログラムを看護師・介護士を対象に実施し、高い評価を得た。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to develop an educational program of communicational skills to elicit daily life behaviors among elderly people with dementia. A characteristic of this educational program is to use the specific action and this evidence to elicit daily life behaviors among elderly people with dementia we found by ethnomethodological method. Another characteristic of this educational program includes to discuss cases by participants of this program. We provided this educational program to nurses and care workers. And they gave a good evaluation to the program.

研究分野：老年看護学

キーワード：認知症高齢者 コミュニケーションスキル 生活行動 教育プログラム

1. 研究開始当初の背景

認知症高齢者がその人らしく生活するための重要な要素の一つは、本人が長年にわたって身につけてきた生活行動を発揮して日常生活ができることである。なぜならば、認知症になっても豊かに保持されている生活行動の細部にわたる技法や習慣にはその人らしさが反映されているからである。しかし、認知症高齢者は、認知機能障害によって、本来保持されている生活行動を自ら実行できないという課題を抱えている。したがって、認知症高齢者が保持している生活行動を引き出すケアが重要となる。このケアは認知機能障害へのアプローチが主であり、ケア提供者による言語的・非言語的コミュニケーションによって行われると考えられる。

認知症をもつ高齢者へのコミュニケーションに関する研究を概観すると、我が国では実態や心がけや対応、欧米では実態の把握にとどまらずコミュニケーション促進プログラムの開発や職員教育などが報告されているが、これらはコミュニケーション全般に焦点を当てており、生活行動を引き出すコミュニケーションに焦点をあてた研究は報告されていない。

2. 研究の目的

- (1) 認知症高齢者の生活行動を引き出すコミュニケーションの具体的技法とその根拠を明らかにする。
- (2) (1)を教材とした「認知症高齢者の生活行動を引き出すコミュニケーション教育プログラム」を作成する。

3. 研究の方法

(1) 目的1の研究方法

対象

Aグループホーム入居者8名(女性)、年齢71~94歳(平均83.5±7.58歳)、アルツハイマー型認知症6名・不明2名、介護度は要介護2(2名)・要介護3(3名)・要介護4(2名)・

要介護5(1名)、入居期間は半月~6年(平均25.25±18.16ヶ月)。

スタッフ7名、年齢は25~73歳(平均45.71±16.47歳)、認知症ケア経験は13~51カ月(平均32.86±16.85歳)。

データ収集・分析方法

2016年3月、Aグループホームの居間における研究参加者の活動を9時30分から19時の間定点にてビデオ撮影した。映像とそれを書き起こしたトランスクリプトをデータとし、生活行動(食事・排泄・入浴・役割を果たす行動)援助場面において、入居者の生活行動を引き出しているケア提供者の言語的・非言語的コミュニケーションの具体的技法とその根拠を、エスノメソドロジ的相互行為分析¹⁾を用いて分析した。

研究代表者所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した。管理者・スタッフ・入居者家族の順で、文書により説明し同意を得た。入居者には、口頭で目的や方法を説明し理解を得た。

(2) 目的2の研究方法

(1)の結果と認知症看護認定看護師・老人看護専門看護師各1名及び看護・介護現任教育専門家1名にヒアリングを行い、「認知症高齢者の生活行動を引き出すコミュニケーション教育プログラム」(以下、教育プログラム)試案を作成した。ケア提供者を対象に、「教育プログラム試案」を実施・評価して、評価結果をもとに「教育プログラム」を完成させた。

4. 研究成果

(1) 認知症高齢者の生活行動を引き出すコミュニケーションの具体的な行為およびその根拠

入居者が役割を果たす行動場面は、食事の準備や片付け・洗濯物たたみの17場面で、その内、役割を果たす行動が引き出されてい

た場面は 13 場面であった。代表的な場面として夕食の準備中の入居者 B 氏（80 歳代 女性、要介護 3、認知症のタイプ不明）とスタッフの相互作用場面全約 9 分間の分析結果を示す。

~~~~**トランスクリプト**~~~~

S ; スタッフ, イラスト中白シャツの男性 B 氏 : 入居者, イラスト中紫の洋服の女性 ~ ~

【場面開始時：おやつ後 6 人で歌を歌うなどくつろいでいる。B 氏はその仲間に加わっていない（厳しい表情、攻撃的発言あり）】



**場面①** 開始

- 1 S : 台所 (B 氏の背中側に隣接) から B 氏に近づき、「B さん、ちょっと切ってもらってもいいですか」
- 2 B 氏 : 「はい はい」
- 3 S : 「ちょっと、手あらってきましょうか」
- 4 B 氏 : 立ち上がりスタッフと一緒に洗面台へ歩いていく

**場面②③** 2分 15 秒 ~

- 5 S : B 氏が座るタイミングで、切ってもらったニラと包丁をのせたまな板とボールを B 氏の前にもっていく
- 6 B 氏 : 包丁をもって切りはじめる
- 7 S : 顔を近づけて、「小さくね」
- 8 B 氏 : 切りながらうなずく
- 9 S : ボールを置きながら「ここへ」
- 10 B 氏 : 下を向いて切っている
- 11 S : 向かい側の入居者側から B 氏の様子をみて、台所へ行き食事の準備をしている
- 12 B 氏 : 座ったまま切っている (2 分) 切り残しを切った方によせて「終わりました」
- 13 S : 台所で食事の準備 (返答なし)
- 14 B 氏 : 包丁をまな板において「終わりましたよ」

- 15 S : 台所から B 氏の方を向いて「はい、食事の準備を 継続している
- 16 B 氏 : まな板を動かし、包丁を持ち切りのこしを切り始める
- 17 S : 食事の準備をやめ、B 氏の方へ近づき視線を向け、直ぐに台所へ戻り、作業継続する
- 18 B 氏 : 包丁を置いて下をみたり、周囲をみたりして、立ち上がり、まな板を引きよせ、切り残しを切り始める
- 19 S : 他入居者の歌に合わせて歌いながら食事の準備をしている
- 20 B 氏 : 切りながら、「はい、さっさとでございます。私は馬鹿ではありませんからどうぞご安心ください、私は……」

**場面④** 9 分 25 秒 ~

- 21 S : B 氏の側に行き、テーブルに落ちたニラをまな板にのせながら「はい、どうもありがとう」
- 22 B 氏 : 「はい、どういたしまして」 椅子に座って、自分の洋服を整えたりしている (場面開始時の厳しい表情、攻撃的発言なし)

~~~~  
場面① 順番交替の特徴としては、基本的に奇数番号 (第一成分) の発話はスタッフとなっており、B 氏はスタッフの発話に応じる (第二成分) という相互作用が主であった。実行機能障害がある B 氏が場面に依拠して自ら持っている生活行動を發揮するのは困難であり、スタッフによる生活行動を引きだすコミュニケーションスキルが必要であるといえる。

場面② スタッフは「……してもらってもいいですか」(1) と依頼の発話し、B 氏はそれに「はい、はい」(2) 応じ、今回の行動が開始された。 依頼・誘いには、承諾と拒否という応答があるが、日常会話においては拒否は避けられ承諾が優先するという構造的特徴があると言われている²。スタ

ップも入居者もこれらの日常会話のルールを身に付けているといえる。認知症高齢者の生活行動を引きだすコミュニケーションスキルとして、依頼・誘いをを用いることは有効であるといえる。

場面③ 行動開始後の入居者の報告や依頼にスタッフが応じない(応答を保留する)ことによって、入居者自らが最後まで野菜を切るということを成し遂げている連鎖が見られた。行動開始後であれば、優先的でない応答も入居者の役割を果たす自主的な行動を引き出す可能性がある。

場面④ スタッフが謝意を述べ、B氏がそれに応じる連鎖で終了した。役割を果たす行動は、行動自体に意味があると同時に本人の達成感につながる事が重要であり、スタッフの発話はその意義があると考えられた。

役割を果たす行動を引き出せていなかった4場面の相互作用では、入居者が家事参加の提案という順番交替の第一成分を開始していた。提案に対する優先的な応答は承諾であるにも関わらず、スタッフは「だから大丈夫」などの発話で提案を拒否する非優先的な応答をしていた。入居者が自ら申し出た行動は、スタッフに承認されず、自己修復することになり、最終的にスタッフの依頼・提案(コーヒーが出来るまでまっているなど)を入居者が承諾する連鎖になっていた。認知症高齢者の役割を果たす行動は、心身の活動性が増加し、本人らしさが発揮され、結果として充実感、達成感につながる。スタッフから役割を果たす行動を依頼・提案するだけでなく、入居者本人から申し出があった場合にもそれらを安全に実行できるようなコミュニケーションの必要性が示唆された。

排泄行動の援助場面では、自らトイレに行き行って排泄ができない入居者計3名のうち、スタッフとの相互作用により、排泄行動を

引き出された場面は得られたデータ内では17場面であった。C氏(80歳代、アルツハイマー型認知症 要介護5)の排泄行動が引き出された1場面(約4分間)を示す。

~~~~トランスクリプト~~~~

- 【食前、各々がテーブルでくつろいでいる】
- 1S : C氏の椅子の背もたれに手をかけて顔をのぞきながら「Cさん、お待たせしました、良いところへ参りましょうか」と手で方向を示す
- 2C氏 : スタッフの顔を見て「どこ行くの」
- 3S : C氏の側へ行きしゃがんで、耳のそばで「お手洗い」
- 4c氏 : (聞き取り不能)
- 5S : 「Cさん、椅子を左に向けますよ」と椅子の向きを変える
- 6C氏 : テーブルに手をつき立ちあがろうとする
- 7S : 「一緒に行きませんか」
- 8C氏 : (聞き取り不能)
- 9S : 「参りましょうか」
- 10C氏 : テーブルに手をついて立ちあがる
- 11S : C氏の手を引きながら「じゃあ行きますね」
- 12C氏 : 歩き出す
- 13S : 手で方向を示し「こちらですよ」
- 14C氏 : スタッフに手を引かれ一緒に歩く(トイレに着く)
- 15S : トイレのドアを開けて「どうぞ」
- 16C氏 : 個室に入る  
(排尿をすませる)

~~~~

①順番交替の特徴としては、奇数番号の言動はスタッフとなっており、C氏はスタッフの言動に応じるという相互作用であった。本結果は、の結果と同様であった。

②スタッフは「..しませんか」(7S)「..参りましょうか」(9S)と<提案>の言葉をかけ、C氏がそれに応じて行動を起こして

トイレまでの移動ができた。トイレに行き、便座を見れば、習慣化して身に着いているそこに座って排尿するという行動は実行することができた。本結果は、の結果と同様であった。

⑤1Sでのスタッフの「・・・良いところへ参りましょうか」に、2Cで「どこへ行くの」と質問している。これは、1Sの発話の「良いところへ」に関心を示した応答と考えられる。②で述べた<優先応答体系>により引き出された「行く」という行動をほのめかす<先行連鎖>³であると考えられる。<先行連鎖>は<提案・誘い・依頼>をより承諾しやすくする作用をされている。生活行動を引き出す工夫として、<先行連鎖>の活用は有効であると考えられる。

食事行動、清潔を保つ行動援助場面の分析結果も上記と同様であった。

(2)「認知症高齢者の生活行動を引き出すコミュニケーション教育プログラム」教育プログラム) 試案の作成

(1)の結果を教材に活用して、その教材を使った教育プログラム試案を作成した。認知症看護認定看護師・老人看護専門看護師及び看護・介護現任教育専門家のヒアリングより、本教育プログラムはリフレクション学習⁴を基にし、ケア提供者が自分の実践と対比させて学べるよう事例を用いた講義および学習の実践事例の検討を取り入れた。教育プログラムの概要は以下のとおりである。

~~~~~

#### 1日目(5時間)

1. 認知症高齢者とケア提供者のコミュニケーション場面の評価 <DVDを用いた演習>  
評価につながったケア提供者側の認知症高齢者のみかたについての議論
2. 認知症高齢者の低下する能力と保持している能力の理解 <講義>

3. 認知症高齢者が保持している生活行動を引き出すコミュニケーションスキル

<事例を用いた講義>

4. 事例検討の方法(目的や方法、用いる書式の説明と事例検討の例の説明)

#### 自分の職場で実践(約1ヶ月間)

#### 2日目(3時間)

参加者個々の事例を持ちよりグループワークと全体発表 <事例検討>  
まとめ

~~~~~

- (3)「認知症高齢者の生活行動を引き出すコミュニケーション教育プログラム」教育プログラム試案の実施・評価

(2)の教育プログラム試案をセミナー形式で実施し、評価した。実施対象は、看護師・介護士15名であった。セミナーの満足度は、満足・概ね満足96%であった。「1日目の学びを意識して実践していたところ利用者の表情に変化があった」「新たな視点、考え方を得ることができたので、今後は自分のコミュニケーションにいかしていける」「今後も継続して実践を振り返る機会が必要」「2日目の事例検討の時間の不足」等の意見が得られた。今後は、事例検討の時間、セミナー終了後の長期的評価について検討する。

<引用文献>

前田泰樹,水川喜文,岡田光弘. エスノメソロジー 人びとの実践から学ぶ. 新曜社,2000.

Levinson SC.(安井稔、奥田夏子訳). 英語語用論.研究社出版,1990:415.

西阪仰. 分散する身体 エスノメソロジー的相互行為分析の展開. 勁草書房,2008.

田村由美,池西悦子. 看護の教育・実践にかすりフレクション. 南江堂,2014.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

小山幸代・片井美菜子・千葉京子・シェザード樽塚まち子・菅原峰子・櫻井正子(2015).
認知症高齢者の生活行動を引き出すコミュニケーションの特徴—エスノメソロジー研究による相互作用分析から—. 日本早期認知症学会誌.8(2),78~87.

小山幸代. 運動器看護に欠かせない認知症を有する高齢者とのコミュニケーションスキル. 日本運動器看護学会誌, 2015;10;2-7.

小山幸代. 特集 認知症看護の極意 認知症高齢者の生活行動を引き出すコミュニケーション. 臨床老年看護, 2015;22(6),55-60.

〔学会発表〕(計3件)

小山幸代・千葉京子・シェザード樽塚まち子・菅原峰子・片井美菜子. 認知症高齢者の生活行動を引き出すコミュニケーションスキルの検討(第3報) - 役割を果たせなかった場面の分析. 第17回日本早期認知症学会学術大会,2016年9月18日, 熊本県熊本市.

Shahzad MT., Koyama S., Chiba K., Sugawara M., Katai M.. Communication skills to elicit daily life behaviors among elderly people with dementia (Second Report): Analysis of interaction between elderly people and staff in toileting support situations. Alzheimer's Association International conference, 2016, July 27, 2016, Toronto, Canada.

小山幸代・千葉京子・シェザード樽塚まち子・菅原峰子・片井美菜子. 認知症高齢者の生活行動を引き出すコミュニケーションスキルの検討(第1報) - 役割を果たす場面における入居者とスタッフの相互作用の分析から. 日本老年看護学会第20回学術集会, 2015年6月14日, 神奈川県横浜市.

〔図書〕(計2件)

小山幸代. 認知症高齢者とのコミュニケーションスキル. 泉キヨ子, 小山幸代編著, 看護実践のための根拠がわかる老年看護技術. ぎょうせい社. 2015;289-302.

文部科学省,小山幸代・シェザード樽塚まち子・千葉京子・他編集協力. 高等学校用 老年看護 初版. 教育出版,2014.

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

小山 幸代 (KOYAMA, Sachiyo)
北里大学・看護学部・教授
研究者番号: 70153690

(2)研究分担者

千葉 京子 (CHIBA, Kyoko)
日本赤十字看護大学・看護学部・准教授
研究者番号: 40248969

(3)連携研究者

シェザード樽塚 まち子
(SHAHZAD, T., Machiko)
北里大学・看護学部・講師
研究者番号: 10406902

菅原 峰子 (SUGAWARA, Mineko)
共立女子大学・看護学部・准教授
研究者番号: 70398353

片井 美菜子 (KATAI, Minako)
北里大学・看護学部・助教
研究者番号: 80623529

(4)研究協力者

櫻井 正子 (SAKURAI, Masako)
社会福祉法人よつば会・理事

和田 奈美子 (WADA, Namiko)
北里大学北里研究所病院・看護部・主任
老人看護専門看護師

行俊 可愛 (YUKITOSHI, Itoshi)
北里大学東病院・看護部・主任
認知症看護認定看護師